

トビタテ！研究推進部

研究推進部長 丹生 憲一

この夏、柏高生は国内・海外を問わず外へトビタテ行きました。本紙 No.12~14 を振り返っていただくと、その様子がご覧いただけます。我々研究推進部も、来週は先進校視察のためにトビタチます。私は、せごどんの故郷・鹿児島県にある甲南高校へ、副部長の土元は石川県にある金沢大学附属高校へ、それぞれ SGH 研究大会に足を運ぶ予定です。いずれも、SGH に指定され5年目・最終年度の集大成を迎える学校です。私は2年前にも、甲南高校での SGH シンポジウムに生徒と一緒に邪魔して、初めて「リサーチクエスト」なることばと出会いました。九州外から参加した学校は本校と茨城県の学校1校のみで、歓待を受けた覚えがあります。しかも、発表した内容は「ブータンで幸せについて考えた」という内容でしたから、なおさらです。3年1組担任の森、2学年主任の辻野とともに、薩摩藩の英雄、西郷隆盛、大久保利通の生まれ育った地を歩き、薩摩弁を話す熱い先生方と語り合ったことが思い出されます。大河ドラマ「せごどん」の始まる前でしたが、新しい日本を創ろうとした人たちが、若い日々を過ごした地に立ち、その高い志に思いを馳せることができました。桜島を見上げて、西郷どんの声を聴いてくるつもりです。

柏高、チェストーツ！（がんばれ）



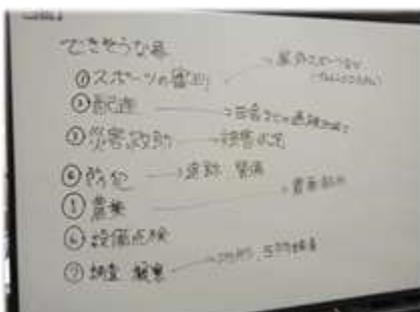
1 1月2日（金） 第1学年総合 第13回

「学ぶ」とはということなのだろうか。と、今回の総合のテーマは哲学的です。「習う」と「学ぶ」はどう違うのか？これまで、柏原高校の歴史について、丹波から出た偉人について知った上で、自分たちはどう学ぶべきか。グループごとに話し合いました。



1 1月5日（月） 第3学年総合 第13回

キャリア教育に関する講座では、大阪大学ビジネスエンジニアリング教授・上西啓介先生から「ドローンを使って社会をかえる」というタイトルでお話をいただきました。「将来のポテンシャルのある高校生がドローンを活用する場面を想定し、その可能性について、エンジニアの立場から大学の先生から提言と示唆を得ることで、イノベーション・職業・生き方を考える機会としたい」というねらいで、柏高生が「ドローンをつかってできそうなこと」を自由に発表しました。そのほとんどは、すでに実現している、あるいは実現しそうなことでしたが、中には「自由に移動できない高齢者のために、思い出の場所などを撮影してあげる」という高校生ならではの発想もあり、先生からお褒めのことばをいただいていた。



1 1月6日（火）第2学年探究 第16回

11月13日には72回生の探究Ⅱでは中間発表会を行います。ほとんどの班で発表会用のスライド作成にかかっています。それぞれの班の持ち時間は5分（3分で発表、2分で質疑応答）。今回の発表の狙いは、他の人からの質問、アドバイスを受けることで、目の前の課題を違う視点から見て、考えをより掘り下げることにあります。この間にも「丹波市の外国人」について調べているグループでは市内の日本語教室を訪れたり、「観光」班は黒井城で行われるハイキングイベントに参加したり、「世界のこどもの貧困」を考えるグループの中には、メールでカンボジア在住の看護師の方に実情を教えてもらったり、またユニセフ協会に問い合わせをしたり…と絶え間なく動いているようです。まだまだ、「中間発表」にすぎませんが、期待できそうです。

この中間発表会を経て、各グループからの応募も受け付けながら、前号で紹介した各発表会への出場者が決定されます。12月15日に東京で行われるSGH報告・発表会にはカンボジア研修旅行に参加し、教育問題を探究中の久下瑞希さん、舟川叶夏さんが参加することになりました。



1 1月7日（水）第1学年探究 第13回

探究Ⅰ担当 土元 優一

これからの研究を進めていく仲間(共同研究者)が集まり、グループでの課題研究が始動しました。前回提出されたリサーチクエスションをもとに、担当者が割り振られました。

提出されたものを(大人の視点から)みると、妙に畏まったものや、その研究を高校生がやって何の価値があるのか、そもそも課題研究として扱うべき題材なのか……ということを感じるものもあります。第1回の授業で「課題」とは、「解決しなければならない問題」として定義しました。今から取り組もうとしているものは「課題」としての定義に基づいているのでしょうか。テーマ設定は非常に重要なことですが、難しく考えることなく、高校生ならではの視点で考えてもらえればと思います。積んでは崩し、積んでは崩しを繰り返す中で、本当に取り組むべき「課題」が明らかになっていくことでしょう。このようなテーマを設定する一連の活動もまた「課題研究」といえるかもしれません。

今後、担当教員や仲間とのやり取りの中で、より具体的な内容へと深化し、研究テーマへと発展していってくれることを期待します。

